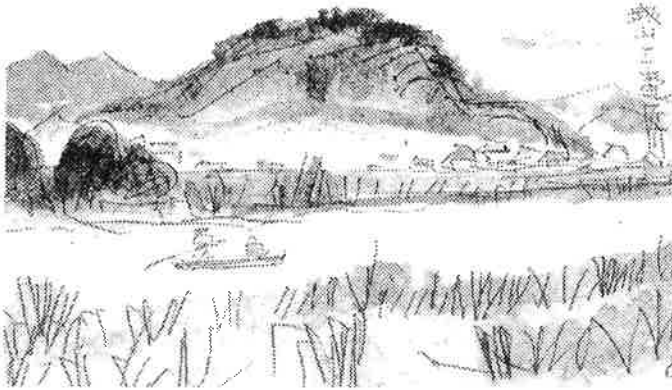


城山



城山と番匠川

文 史談会員分担執筆

題字 白井龍峯

(賛助会員・佐伯市城下西町)

挿絵 工藤幸夫

(佐伯市大平区)

この文は、大分合同新聞社佐伯支局の要請により佐伯史談会員が分担執筆、昭和五十六年八月五日より五十九回にわたり、同紙に連載されて好評を博したものである。

新聞連載にあたり、紙面の制約により、書き足りない不十分なところもあるが、はじめて「城山」を総合的にとらえたものとして、興味深いものである。目に触れる機会がなかった会員のため、新聞社のご好意により題字・さし絵もそのままに掲載する。

佐伯市の中心街に位置し、長い間、佐伯湾岸の人々の暮らしを見つめてきた城山（八幡山）。多くの市民の散策の場であり、市のシンボルともなっているその城山の山林部分が、かつての佐伯藩主の子孫で持ち主である毛利高棟氏（東京在住）から市に寄贈されることになり、現在、詰めの話し合いが進んでいる。毛利氏の好意に全市民が感謝しており、これを機に城山の成り立ち、築城動植物など各分野から佐伯史談会の方々に紹介して頂いた。

はじめに

高 木 嘉 吉

一、佐伯市民の散策の場

城山は佐伯の町の西北にそびえている標高一四〇呎、周囲三キロの小さな山である。北側は狭い谷を隔てて白湯の山と対峙（じ）しているが、東・南・西の三面は山すそ

を平野に伸ばし、さえぎるものはない。

自然は人との触れ合いがなければ、永久に自然であって、歴史に姿を現すことはない。城山も太古以来、庶民が薪を拾う程度で眠っていたが、これを歴史の舞台に最初に引き出した人は緒方三郎惟栄である。

惟栄は平家が没落するころ、大野郡緒方郷を根拠地として活躍した豊後武士団の棟梁（とうりょう）であった。大神、緒方、佐伯は一系で、惟栄の時代には大神氏の勢力が佐伯地方に浸透していた。

惟栄は建久年間（一一九〇―一一九八年）、石清水八幡を勧請して城山山上に祭ったので、以後名もなき小山は「八幡山」と名付けられ、住民に親しまれるようになった。以上は伝承で、史料の裏付けはない。このことについて羽柴佐伯史談会副会長は佐伯史談一二五号に独自の見解を発表しているが、傾聴に値するものである。

惟栄の晩年については不明のことが多い。しかし建久元年に帰国の途中、山香郷立石（山香町）で死亡したものととして終止符を打ちたい。惟栄が建久七年に大友能直の豊後入国を浜脇（別府市）で迎えたというような話は、源為朝が配所から琉球に渡ったり、源義経が蒙古に行っ

てジンギスカンになったりしたのと同じで、英雄の死を悼み、その長生を願う民衆のつくり出したものである。

二 毛利高政が城を築く

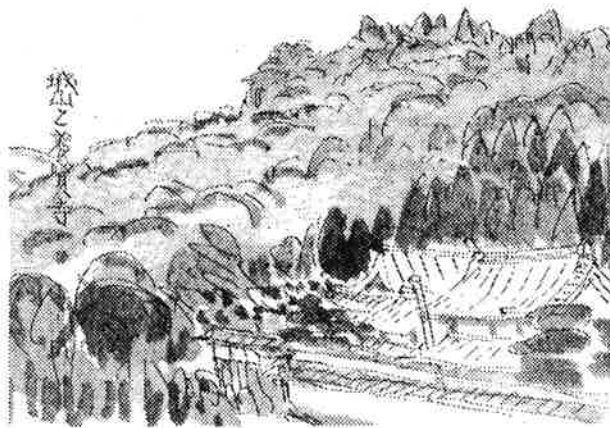
城山を有名にした第二の人物は毛利高政である。高政は豊臣秀吉の子飼いの武將で、木下藤吉郎時代から秀吉に仕えている。

高政は文禄、慶長と二回の朝鮮出兵に出陣した闘將で、軍監を務めている。武將として軍略にも長じたが、また政略家でもあった。「関ヶ原の役」の後、不利な立場になったが、巧みに切り抜け、慶長六年、佐伯二万石に移封されたのは彼の政略家としての面目を語るものである。

高政は慶長九年、八幡山に城を築き始め、十一年に落成させた。「佐伯城」あるいは「鶴屋城」と呼ばれるものがこれである。城の規模は後述するが、高政にとっても領民にとっても、大工事であった。

緒方惟栄が勧請した八幡宮は、築城開始とともに白濁の現在地に移され、城の鎮守として崇敬された。

高政から高謙まで十二代二百七十余年、佐伯城は落雷、失火、老朽などによって次第に荒廃し、歴代藩主の中には城の修復に力を入れた人もあったが、大勢はどうすることもできず、明治四年の廃藩置県に続き十二代高謙が佐伯を去るに至って全く荒廢した。



城山と養賢寺

城山を有名にした第三の人物は国木田独歩である。独歩は明治二十六年九月、鶴谷学館の教師として来佐し、明治二十七年八月まで佐伯の子弟の教育に当たった。佐伯を舞台として「源叔父」「鹿狩」「春の鳥」などの名作を書いている。彼はこよなく佐伯の自然を愛し、わずかの期間に尺間山、彦岳、元越山などの山々に登ったり、黒沢の桜や『銚子湖』の探訪もしている。しかし、彼が最も愛したのは城山で、何十回かの登山を重ね、山頂から若宮八幡社に下り、白方、岡の谷を経て城山を一周するコースをしはしば歩いてゐる。それは、彼の日記「欺かざるの記」に詳しく記されている。

「春の鳥」は城山山頂を舞台としており、天守閣の石がきなどが巧みに描かれている。独歩は、文学で城山や佐伯を宣伝した恩人といつても過言ではない。

登山道

市野瀬 仁

一 街に近い公園「三の丸」

大手前付近から城山をながめると、もくもくとしたシイの塊が、まばゆく目に映ってくる。

太陽に向かう初夏の深緑は、生命力にあふれて、生きる喜びを感じさせてくれる。山麓（ろく）に建てられた佐伯文化会館の白い建物、緑をバックにくっきりと映え、そのコントラストが美しい。

寛政七年（一七九五年）、広瀬淡窓が、佐伯に遊んだときに詠じた絶句一首。

鶴城の楼閣海の浜（ほとり）

松は緑に沙明かに塵を起こさず

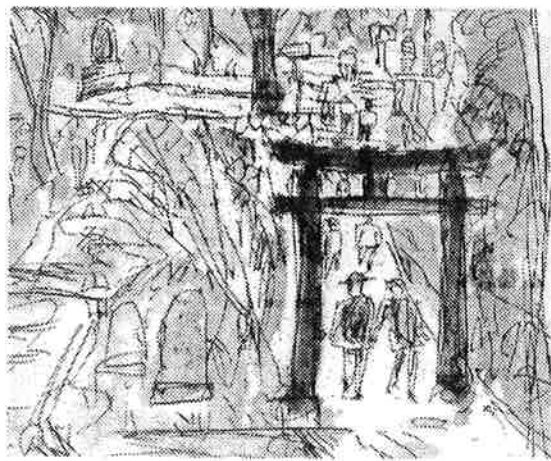
百浦の魚塩民自ら富み

風帆相接す浪華の津

文化会館を左に見て、鳥居をくぐり、四十竝ほど登ると、平坦な広場がある。登山口の鳥居の右手前に「武家屋敷見取図」があり、左手の「鶴屋城再現の鳥瞰図」には独歩の「春の鳥」の一節も書き込まれている。上の段の登り口にも「史跡豊後佐伯城址」の解説文を見ることが出来る。この平坦な地は、江戸時代の射的場であつ

た。それを明治百年（昭和四十三年）を記念して、市の企画で拡張、整備し公園化した。

案内板には「頂上まで八一〇級」とあり、城山によく来る野鳥、遊歩道、城山還元之碑などが説明されている。左手の杉木立の下に、独歩の「城山」の文学碑が見え、ツツジ、ツゲ、桜、松の木々が、三段からなる広場の施設に配置され楽しい憩いの場をつくっている。



登山口

ここは歴とした「三の丸」であるのに「二の丸」と思っている人が多いようである。頂上を城址公園というのに対し、文化会館付近を含めて山麓を「三の丸公園」とすれば、誤解は解消するのではなからうか。

登山口三の丸は、街にはど近く、城山の予備知識を与えてくれるうえに、やすらぎを覚える格好の場所である。城山の麓にのこる独歩の碑源おちのこと語るが如し

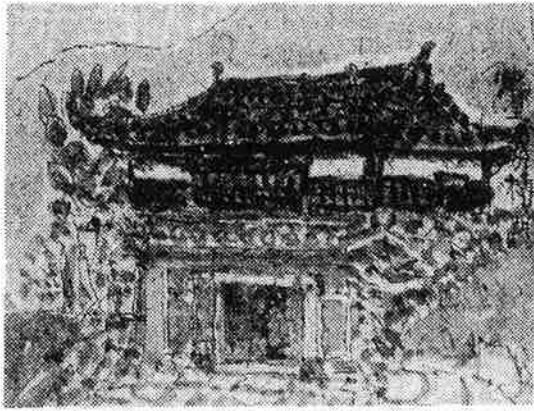
（蒲江町・木原其二）

二 戦略的に尾根を通る

「明治維新前文久ヨリ慶応年間ノ佐伯城下地図」によれば、登山道はハコースある。中央の道だけ広く描かれ、他の七コースは細い線と並んで木が描いてあり、すべて尾根を通っている。おそらく戦略に必要としたのである。

「城山遊歩道御案内」に沿って、現在利用されている四つのコースを紹介しよう。

Aコース 前記の古地図にもこのコースが示されていることは興味深い。大正七年、青年団の奉仕作業で完成



鶴屋城の櫓門

した道で、設計者は市内船頭町の故脇田謙吾氏であった。道はこう配がゆるやかで、幅が六呎を越す所もある。黄土の道を踏みしめながら、しばらく登ると、秋には落ち葉の敷き詰められた道が続く。途中「山頂まで××呎」の標識も整備され、マーガレットやアジサイの咲く花壇も目を楽しませてくれる。その道に箒（ほうき）の目が見通っているのを見ると、心温まる思いがする。

八合目付近に、佐伯湾と市街地の全容がながめられる場所があり、一息入れるのによい。道は変化に富み、最も市民に親しまれ、利用されているコースである。

Bコース

武士の通った主要幹線の道である。城壁のすぐ下で二手に分かれ、右は「本丸」の外曲輪（そとくるわ）に、左は「二の丸」の門に通じる。尾根にはさまれたくぼ地で、急こう配のため蛇（だ）行している所が多い。道幅は二呎ぐらいで砂岩、頁岩（けつがん）が露出しており、自然のままの姿がよい。頭上は樹々に覆われ、湿気勝ちの道は時折、鳥のさえずりが聞こえる。生物の生態研究には欠かせないコースでもある。石畳を踏みながらいしえをしのび、孤独の楽しさを味わえる道。独歩がしげく登ったのもこの道である。「哲学の道」と名づけたい。

城山に登る吾等の頭上には
椎の花咲きそよ風わたる

（津久見市・橋高早苗）

三 樹間から市街地一望

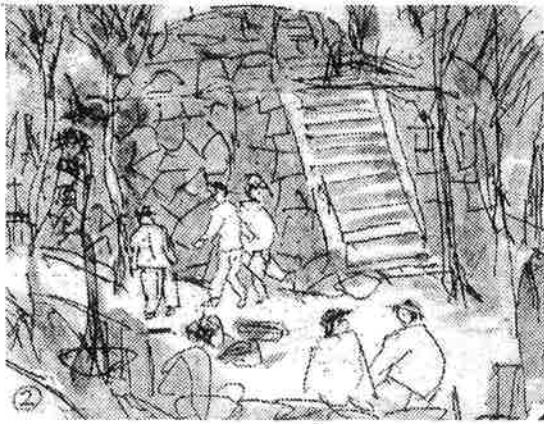
城山の朝鮮楨とホルトの木
教わると来ぬ歌会終りて

（本匠村・久々宮永）

Cコース 登山口の左手に、「文祿の役、藩主高政公朝鮮より御持帰りの記念樹」と刻まれた石碑がある。これから四〇呎ほど急こう配の道を登ると広場に出る。藩

主が尾上の茶屋、後、翠明亭(すいめいてい)と呼んだ涼み屋があった所である。明治百年記念にここを整備し、その名を残して「翠明亭」とした。

木々の間からは市街地が望まれ、電電公社の「ノボラアンテナ」が目をはきく。興人の煙突が一本、八島の真ん中に突っ立っているように見える。濃霞山(のおかやま)の東端にある佐伯造船所のクレーンが、寂しく頭を垂れているのが印象的である。ここから頂上までの道は、幅は狭いが石ころがなく、踏みしめる落ち葉の弾力がたまらなく心地よい。登り詰めると「西の丸」の城門跡に着く。



城山山頂

の道は、幅は狭いが石ころがなく、踏みしめる落ち葉の弾力がたまらなく心地よい。登り詰めると「西の丸」の城門跡に着く。

独歩もこの道を何度か登ったのであろう。

Dコース 「白濁遺跡入口」と書いた白色の高い標識が立っている。原始時代は、この辺りまで波が打ち寄せていた。神社の前を流れる百谷(ももたに)川付近は深田で、城の背後を守る自然の要塞(ようさい)でもあった。

若宮八幡宮の大鳥居をくぐり、清められた神域を抜けると、急こう配のでこぼこ道となる。十分ぐらいで「水門(みずのもん)」跡に着くが、西側にある唯一のコースである。築城の際、山上の神祠(しんし)を白濁に移した関係からも、昔から武士の通った道である。

四つのコースのうち最も急こう配で、道幅も狭いうえ石ころ道で、登るには注意が必要である。鶴城高校の柔道部員は、Bコースから登って、この道を裸足で下るのだから若者にはかなわない。

八合目付近には雄池と雌池があり、かつては古城の「水の手」飲料水場であったこの池も、いまではオオイタサンシヨウウオのすみかになっており、天然記念物として注目されるようになった。

展 望

市野瀬 仁

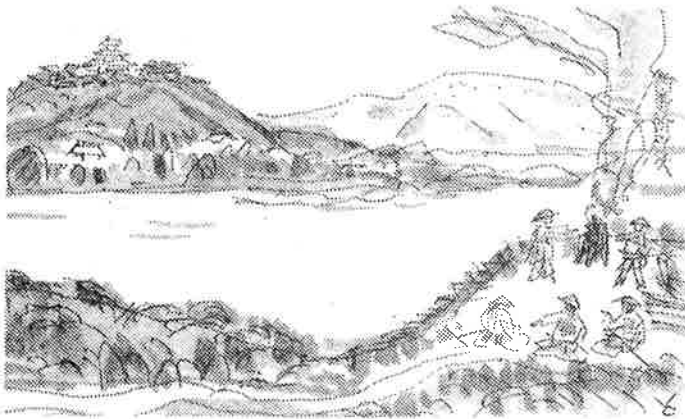
一 かすかに四国の山々

城山は矢筈毛利の居城たり
昔をしのび今登りこん

(本匠村・河野一人)

少しばかり汗ばんで、頂上に登りつめると空・海・島・半島・船・煙突・市街が一望の中に展開する。左右から海に迫る半島の間には海原がきらめく。右手に八島、左手に片白島。手前の濃霞山は前方後円墳に、竹ヶ島は円墳に、その形が似て見えるが、造山運動のなせる業なのであろうか。

海原の中央に、遠く、小さく、白く立っているのが水ノ子灯台である。かすかに四国の山なみが望まれる。日豊海岸国定公園にふさわしい、すばらしいながめである。城山に登る人が後を断たないのも、一つにはこのながめの美しさに魅せられるのであろう。湾上に自衛艦が十二隻浮かび、島のように動かない。造船所や二平合板など



〃御番所の浜〃から望んだ城山

斜陽に泣く沿岸に不気味な予感が走る。三十数年前の軍都佐伯の悪夢が……。天然の良港は、また天然の軍港に通ずるのではなからうかと。

眼下に見える一万の家並みは、三角州を完全に隠して

しまったが、
寺の麓（いら
か）だけは位
置も色も変わ
りない。慶長
十一年（一六
〇六年）高政
公が造った城
下町は、ここ
十数年前の間
に住宅が建ち
並び、土と緑
を消してしま
った。これも
核家族のまた
らす現代社会

の風景であろう。大きく半弧を描いて流れる番匠川が、灘山の東端に迫ったところに「御番所」があった。江戸時代、参勤交代のお帰りが近づくと狼煙（のろし）を上げた。それを見張るのが外曲輪（そとくるわ）である。四ヶ四方の石畳の位置が、東方を望むのに最も適した場所であった。元日の未明、五百人余の市民が登り、日の出をおがんで万歳を三唱するのもここである。

城山の天高らかと笑う声

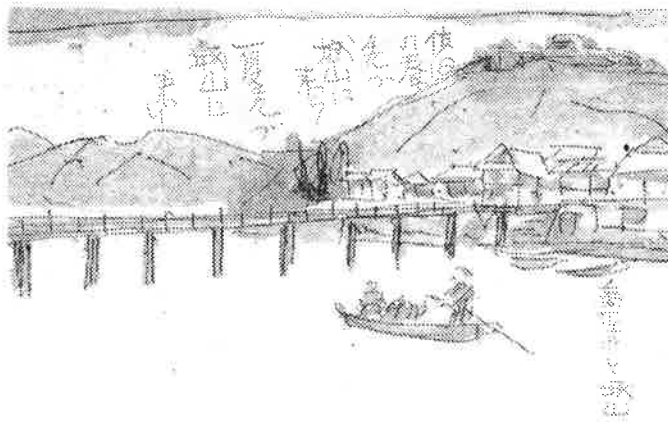
わが級友はここに集いて

（佐伯鶴城高校・御手洗吉徳）

二 洋々と流れる番匠川

リアス式海岸に住む私たちの見る自然は、平野部のそれに比して小型である。山や川、平野と港すべてがそうである。

ここ「西の出丸」は二重櫓（やぐら）のあったところである。石がきの上に立ち、南を望めば縹渺（ひょうびょう）（よう）と流れる番匠川の大きさに驚く。二六〇呎の幅を持つ川面が東西に、目いっぱいに入ってくる。さざ波一つ立てず、洋々と流れるかのごとく、動かざるがごとく



番匠川と城山

に。
昭和十八年九月、空前の大洪水に見舞われ、大きな被害を受けたために造った人工の川である。兩岸の河川敷に設けられた緑地帯。その一角のスポーツ公園に人影が見える。上

流から稲垣橋、長瀬橋、佐伯大橋と車の流れもしげく、近代的な美観を装っている。以前の川は、西谷の山すそを洗っていた。南を正面とした鶴屋城は、この川が表玄関と

なり、参勤交代には城南中学校前の、角石（かくいし）から出帆した。当時の川は、いまよりはるかに清き流れであった。

毛利藩の俊才・中島子玉は、番匠川舟遊びを次のように詠んでいる。

十里の澄江流れ東に向う

雙槳（そうしょう）舟のかじ）揺れる柳灣の風

女兒捉えて戯むる波間の月

省りみず銀釵（ぎんさい）銀のかんざし）の水中に落ちるを

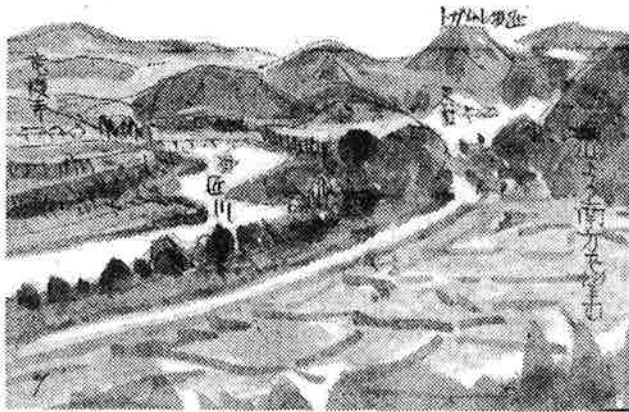
八幡山と煙草山のりよう線が、左右に沈んだ間に市谷集落が見える。さらに川下に柏江集落があるが、ここからは山陰になって望めない。柏江は高政の弟・森九郎左衛門の居住の地で、墓もある所。元禄の昔、佐伯城下町と競って繁栄した天領の港町で、大阪との往還の便も多く、中央文化の波がいち早く流入した地であった。この地方に残る、堅田踊り”は、上方文化の名残をとどめており、佐伯地方の大切な無形文化財として守られている。

近代的な、美しい番匠川をながめながら、山のかなたの古（いにしえ）の文化遺産を、守り続けてきた人々の

ことを思うとき、時代の流れの厳肅さが身にしみてくる。

三 埋めたてられる水田

”二の丸”から西方を遠望すると尺間山、椿山、冠岳、米花山など六〇〇級級の山々が、すそ野もみせず七重八



城山より南方を望む

重と山並みを打つ。西南のはるかかなた、ひときわ高くかすんで見えるのが傾山（一、六〇二級）である。独歩は悠（ゆう）久のかなたに沈む夕日を見んものとの地に登った。

「二十一日午後二時半頃より収二を伴ふて山

に登る。是れ窓外を望みし時遠山極めて近く現はれ、秋の気高く空の色極めて澄めるを見たればなり。由て夕陽の美を得んことを望みたればなり」（「欺かざるの記」）
三_ホほど前方に、頂上が屋根のような形をした山が見える。佐伯氏ゆかりの柵牟礼（とがむれ）山（二二三・七_ノ）である。

大永年間（一五二一—一五二八年）、佐伯氏の強大化を恐れた大友義鑑は、城主佐伯惟治を臼杵長景の讒言（ざんげん）により憤死させた。江戸末期、毛利藩の儒官・秋月橋門は、この義憤を律詩にたくした。その末尾に次の一文がある。

「壮士何ぞ堪えん慷慨（こうがい）の切なるを、野花折り取って墳を祭って帰る」と。

時は流れて昭和五十一年六月、佐伯史談会は頂上に「史跡柵牟礼城址」の石碑を建立した。

城跡の石碑よ語れとこととはに

この嶺（みね）に高くそびえて

（羽柴 弘）

西の山ろくには秀麗な十三重の供養塔（県指定有形文化財）が、それより南に大きく蛇（だ）行して流れる番匠川をはさんで、佐伯氏の菩提寺（ぼだいじ）龍護寺が

見える。古い歴史を残すこのあたりも、十数年前から工場が建ち始め、ここかしこに住宅が水田を埋めたてた。今では脇地区と白瀉に、わずかに水田を残すだけとなってしまった。

毎朝、登山する人々は、四季の移り変わりをこよなく愛している。常連の婦人の一人は「もうこれ以上、水田を埋めないで欲しい」と祈るように話してくれた。おりしも日豊線を、緩慢な自然の動きに反し、列車が猛スピードで通過した。



翠明台

登る人々

市野瀬 仁

心の支え 善意の施設

隣の家に住んでいた独歩から「尻（しり）上がり」が上手だとはめられ、中国の絵をもらったという山中道夫氏は、やがて九十二歳の高齢になられる。山中氏は、土族の子ら七、八人と「二の丸」で「ぐんじ（軍事）遊び」をしたことを懐かしがる。時は日清戦争のころである。

漫画家の富永一朝氏は「たまに帰郷すると僕は真っ先に城山に登る。城山に登らんと佐伯に帰った気がせんなあ、というのが帰郷した時の合言葉だ。思えばここは子供の遊び場所だった」といつている。

十二年間、朝夕の二回、登り続けている田辺利秋氏は「山の高さといい、眺望（ちやうぼう）といい、健康に佐伯の城山ほどよい山は、県の内外にないですよ」と激賞している。

一日平均何人ほど登るのだろうかと思ひ、城下東町の

石田近城氏に尋ねると、七十人は超すだろうということであった。主だった登山者をあげてみると、毎朝鳥居の下を五時半に出発する会員約二十五人のグループ、ロータリークラブのアクト十五人は毎月一回頂上の清掃に登るほか、代表の一人が交代で毎月一日と祝日に国旗を掲揚している。佐伯鶴城高校の運動部員もよく見かけるグループである。城山スポーツ少年団（佐伯小学校・団員三十三人）は翌明台に登って大声を出すのが習わしである。毎日一人で登る常連は約十人。その他日曜日の家族連れや学生、研究団体がたまにあるが、これらの登山者に対してロータリークラブやライオンズクラブからの、善意の諸施設は人々の心の支えとなっている。

佐伯文化会館前に「野村越三胸像」がある。明治四十年から佐伯小学校に在職した先生で、体育の指導にささげた情熱と人格は、児童や市民に大きな影響を与えた。十四年前、城山スポーツ少年団を結成した河野松男氏は、「仰ぎ見る城山に子供たちの成長を見守って欲しい」と念願したという。こうした、市民の愛する城山は、母のごとく、神のごとく、信仰の山とさえなっている。城山は佐伯のシンボルである。

城山に登るもこれが最後かと
七十四歳の吾も杖もつ

（佐伯市・安藤ハナ）

次の文は「田能村竹田展」見学の折、芸術会館の依頼により特別寄稿され、「大分芸術会館だより」第十四号に掲載された文を、そのまま転載したものです。(塩月)

私は竹田が好きになった

福岡教育大学名誉教授
佐伯史談会副会長

清 田 義 雄

わたしは絵は門外漢で何もわからない。それでも今、竹田が大変好きになった。たまらなく好きになった。竹田の絵がわかったなどは云えないが。

元来日本画はあまり好きな方ではなかった。日本画観賞のすぐれた鑑賞設備である床の間の機能の変化で、特に文人画などむつかしくてわからないものだときめてかかっていた。竹田展が開かれるに当って、芸術会館の熱意がわたしを引きずり廻したという事かも知れないが、兎に角すばらしい展覧会を見せてもらった。こんなむずかしいものをこれ程わかり易くときほぐし、たまらなく好きにさせるでだては、主催者自身がその気でなければ到底人をひきつけられるものではない。

年数をかけ、足でかせいだ収集、その苦勞が目に見えるような展覧会である。こうした努力による集積なればこそ、並べ方の工夫が参観者に竹田を身近かなものにさせてくれるのであろう。

勿論背後に専門の学者陣が、真贋判定の分野だけでなく、講演、解説、報道などに行き届いた紹介がなされている。

更にビデオ、展覧会解説書としての「竹田」の編集はありがたい。これ程に準備された展覧会があるだろうか。特に団体見学への親切さには頭が下がる。いつまでもいつまでも時のたつのを忘れさせて見せて貰った。初日は独りで六時間、次には団体引率で二時間以上も過させて